

長崎県本部の事務局長を1992年から10年間務めた佐久間洋子さんの遺稿を紹介します。

おにぎりがのうなった

私の記憶の始まりは、防空壕で息を殺している自分です。空襲警報は寝入った頃にきまって鳴りました。寝ぼけたまま、半ば引きずられて防空壕に押し込められ、そんなことが何回も続いていた。私は5歳3カ月でした。自宅は爆心地から3・7キロの岩瀬道町にありました。

8月9日は、自宅から歩いて10分の八幡神社の裏の林に、隣組の人たちといきました。お昼のお弁当の包みを広げた途端に強風にあおられ、おにぎりは転がる、子どもは倒

いま伝えたい

被爆者から

2015年・被爆70年
NPT再検討会議へ

〈8〉 5歳で被爆、新婦人の目的に「これだ!」と

長崎・佐久間洋子さん



被爆体験を語る、ありし日の佐久間さん

れる、座っていた大人たちも斜面を数分ずり落ち、立木を背にやっと止まりました。

大人たちが息を潜めている中で、「おにぎりがのうなった。ひもじか」と泣き叫んだら、「泣けばもっと腹の減るやろが!泣き止まんか!」と野太い声で怒鳴られ、怖くて声が出ませんでした。

「何か異常な事態が起こっている。とにかく家に帰ろう」と林を出たのは夕方でした。辿り着いた自宅は、壁が落ち、障子はずれ、茶棚が倒れて足の踏み場もありませんでした。

父の被爆、祖父の死

父は暗くなってから、全身包帯だらけの姿で帰ってきました。

翌日は、爆心地から200メートルの浜口町に出張していた祖父の消息を求め、母に手を引かれて歩き回りました。3日後、うつ伏せで上半身黒焦げの

遺体を見つけ、腹の上の焼け残った数珠で祖父と確認。その場で焼いて骨を拾い持ち帰りました。

それから間もなくの屋下がり、父はあぐらをかいたひざの中に私を抱き、「戦争が終わった。もう飛行機は飛んでこない、防空壕にも入らんちゃよか」と自分に言い聞かせるようにつぶやき、晴れ渡った空をいつまでも見上げていました。思い返すとそれが8月15日、玉音放送を聞いた後だったのでしょう。

家を引き払い、翌年には伯父や伯母など1年に五つも葬式を出し、借金は坂を転がる雪だるまのように増えていきました。被爆後、白内障や肝臓疾患、高血圧、脳溢血で半身不随になった父は早く退職をし、わずかな退職金はほとんど借金払いで消えました。私は小学生のころ、体中におでこがで、喘息の発病などで緊急入院を繰り返しま

した。両親とも働けなかったのが、高卒後、一人の給料が一家の生活を支えていました。29歳で結婚し、最初の子は喘息の発作で産むことができませんでした。幸い2年後に女の子、次に男の子に恵まれました。

ニューヨークで証言

長女が生まれた年に、新婦人に入会しました。会の目的の第一に「核戦争から女性と子どもの命を守ります」を掲げている。「これだ!」と思いました。平和を守るもの、壊そうとするもの、地球をこれ以上傷つけない子どもたちに渡すために、何をしなければいけないか、何を伝えるべきかなど、新婦人の中で、たくさんの事を学びました。

原水爆禁止世界大会にも必ず出席し、2010年のNPT再検討会議のニューヨーク行動に2000人を超える署名を集めて参加。サンフランシスコの大学で、学生たちを前に被爆体験を話しました。日本から遠く離れたところに住む若者たちに被爆体験を語ることに葛藤がありました。が、ニューヨークで私と同じ歳の女性の証言を聞き、「私も話してもいいんだ」と吹っ切れました。後押ししてくださったみなさんに感謝します。

佐久間さんは、2012年に72歳で亡くなりました。